

除夜の鐘

令和元年12月第5週放送

「除夜の鐘 つきをさめたる 僧の息」

明治に生まれ、大正、昭和初期に活躍した俳人 にしじまぼくなん 西島麦南の句です。

大晦日、除夜の鐘をつき終えた僧侶の吐く息が見える、という意味になるのでしょうか、寒い時節ですので、僧の息は白く、夜の闇に浮かびあがっていることでしょうか。長い時間鐘をついていたことで、息は荒くなっているかもしれません。

解釈はさまざまですが、この句の舞台は、雪の中の修行道場である気がします。曹洞宗ですと、福井県の大本山永平寺、石川県の本山總持寺祖院などが、大晦日に雪が降っているであろう修行道場になります。

曹洞宗の修行の要は坐禅です。「只管打坐」といわれます。目的やはからいをはなれて「ただ坐る」ということです。これは、とても難しいことです。

私たちは、〇〇のために、という目的や、それを行うことでこうなりたい、といったはからいが生じます。もちろん、それらは、私たちが生きるために必要なもので、社会生活を営む上では、大切なことです。

しかし、それらが過剰になると自分中心の思いが強くなり、周りとの摩擦が生じ悲しい思いをしたり、思い通りにいかないことで、怒りなどの感情が生じ、苦しみになるでしょう。

それらを手放し「ただ坐る」というのが「只管打坐」なのです。

そして、その心を生活全体に浸透させていくのが、曹洞宗の修行といえるでしょう。食事や掃除などの日常的な営みも、「ただ」行うということです。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

静かな夜の雪景色の中、墨染^{すみぞめ}の衣をつけた修行僧が、除夜の鐘をついています、この修行僧は、目的やはからいを離れ、ひとつきひとつき鐘を打てたでしょうか。

それは、端^{はた}からは、うかがい知ることはできません。けれど、除夜の鐘を打ちおさめた僧侶の白い息は、鐘のひとつきひとつきを、はからいを離れ、一心についたからこそ浮かぶ、凜とした表情を想像させます。きっと、その僧侶のつく鐘の音色は、澄んだ響きとなるでしょう。

除夜の鐘をついている間に、いつしか年が改まり、新たな一年の始まりを迎えます。きっと、この僧侶は、除夜の鐘をつくようにして、新たな一年の毎日毎日、ひととき、ひとときを「ただ」過ごしていくのでしょうか。

みなさまも、除夜の鐘をつきながら、あるいはその音色に聴き入りながら毎日毎日、ひととき、ひとときを、一心に「ただ」過ごすことを考えてみてはいかがでしょうか。

— 終 —